

## 学校教育目標を具現化する教育課程編成の工夫

函南町立桑村小学校 教諭 小長谷一史

### 1 研究目的

教育課程の目的は、「各学校の特色を生かした『カリキュラム・マネジメント』の推進による教育活動の質的向上により、児童の資質・能力の育成を図ること」と「育みたい資質・能力を明確化するとともに、それを家庭、地域と共有し、連携及び協働することで『社会に開かれた教育課程』の実現を図ること」である。

自然豊かな環境で、児童数が少ない本校において、人的・物的資源を存分に活用した特色をだし、児童の資質・能力を育成し、児童がよりよく成長していくために本研究主題を設定した。

そこで、「学校教育目標」を具現化するための「つけたい資質・能力」を設定し、それを児童・教職員・保護者・地域住民が共有できれば、ベクトルが同じ方向を向き、子供たちの資質・能力を育成できると考えた。教務主任として、意図的・計画的に「つけたい資質・能力」の育成を教育課程に反映させることを心がけることで、全教職員が「つけたい資質・能力」を意識して教育活動を推進していくことをめざしていく。

### 2 研究方法

(1) 学校教育目標の具現化に向けた「つけたい資質・能力」を明確にした取組

- ①つけたい資質・能力の明確化
- ②ステージ制の廃止
- ③つけたい資質・能力の設定と年間を通した PDCA 評価サイクル
- ④学校評価との関連

(2) 学校教育目標「夢に向かい 感性を育む 桑っ子」を推進する取組

- ①豊かな体験活動と表現活動の計画的な設定
- ②読書体験活動の充実
- ③地域との協働

### 3 研究経過

(1) 学校教育目標の具現化に向けた「つけたい資質・能力」を明確にした取組

①つけたい資質・能力の明確化

令和4年度末の教育課程編成会議で、学校教育目標「夢に向かい 感性を育む 桑っ子」を受けて、本校の子供たちにつけたい資質・能力を5つに厳選した。「A豊かな感性を働かせる力」「B他者の意見を聴き、自分の思いを話す力」「C自分の思いを大切に、深く考える力」「D自分と相手を大切にし、よりよく行動する力」「Eめあてに向けて取り組み続ける力」の5つを、子供の実態、教職員の思い、保護者や地域の方々の願いを踏まえて設定した。(資料1)

②ステージ制の廃止

令和4年度は、指導部から提案される行事や活動における指導事項の中で、

つけたい資質・能力を反映させることができる提案について、「つけたい資質・能力が発揮された子供の姿」「そのための手立て」「評価内容と方法」という項を立てて明記した。そして、職員会議で全職員が共有し、手立てをもとに教育活動を実践した。その後、行事や活動等が終わり次第評価をした。評価と改善を短いスパンで行い、達成状況や課題、改善すべき内容を全職員で共通理解してきた。このように、つけたい資質・能力の育成を柱にPDCA評価サイクルを回した。

その一方で、本校は「ステージ制（4期）」を行っていた。「出会いのステージ（4・5月）」「協力のステージ（6～10月）」「挑戦のステージ（10～12月）」「自信と感謝のステージ（1～3月）」それぞれ子供たちからアンケートをとり、その結果から次のステージの指導の力点を話し合い、ステージ制でもその都度評価を実施し、PDCA評価サイクルを行ってきた。

このように、「つけたい資質・能力」と「ステージ制」の2つの柱で、PDCA評価サイクルを回したのであるが、教育活動が煩雑で実行できなかつたり、これまでの活動を踏襲するだけのものになってしまったりしたという課題が出た。

そこで、ステージ制と関連した行事や活動等の見直しや学校教育目標を具現化するためのつけたい資質・能力を1年間のスパンで検証していくという理由から、ステージ制を廃止した。（資料2）

### ③つけたい資質・能力の設定と年間を通したPDCAサイクル

年間を通して、子供につけたい資質・能力が育まれているか把握し、それらを検証し、改善していく必要がある。学校評価では前後期の年間2サイクルしかできず、スパンが長く改善しにくかった。そこで、令和4年度に行った「つけたい資質・能力を反映できる行事や活動等の指導部提案」を継続して行った。しかし、育成すべき資質・能力の項目が多すぎて、あれもこれもと取り組んだのでは、子供の資質・能力の育成が難しいのではという反省を踏まえ、令和5年度は、つけたい資質・能力を反映させることができる指導部提案を月1つにしぼり、年度始めに位置づけて計画的に行った。（資料3）

そして、つけたい資質・能力ごと「つけたい資質・能力が発揮された子供の姿」「そのための手立て」「評価内容（数値・子供の表れ等）と方法」（評価をしない場合もあり得る）という項を立てて、提案文書の目的（ねらい）の次に「つけたい資質・能力との関連」と項立てて明記した。全職員で共有・実践し、担当が評価を取りまとめた。

令和4年度の課題でもあった短いスパンのサイクルを意識して、評価期間終了後、評価や職員の感じる改善要因や成功要因などを打ち合わせ等で共有した。そして、児童・保護者・教職員のアンケート分析と考察を8月と1月の学校評価検討会議において実施した。

### ④学校評価との関連

学校評価の中で、つけたい資質・能力について質問項目をおこしている。学校評価と関連させてつけたい資質・能力を検証すれば、子供・保護者・教職員のデータや意見が集まると考え、学校評価と関連付けて「学校評価検討会議」

として、学校評価の中で「つきたい資質・能力」を検証していくことにした。  
(資料4)

また、学校応援団会議(CS会議)において地域や保護者の方々に、つきたい資質・能力の現状や課題、手立てを共有することができるのは、まさに「社会に開かれた教育課程」の実現であると考えます。(資料5)

## (2) 学校教育目標を受けて「感性を育む」活動を推進する取組

### ①豊かな体験活動と表現活動の計画的な設定

本校の強みの一つは豊かな自然環境である。四季の移り変わりを、視覚・嗅覚・聴覚・味覚・触覚といった五感で感じ取ることができる。教育活動の中でも4月にお茶摘み体験、5月に原生林探検、6月頃には野菜の栽培を開始し、秋に収穫する。また、地域人材を活用し、ピアノ演奏で歌唱や鑑賞を行うドリームコンサートを開催している。感性を育むためには、自然だけでなく情操を養うことも大切である。その活動が、体験活動で終わってしまい、感性を育むまで到達しないことがないように、活動のまとめや振り返りなどの表現活動をセットで行った。(資料6)

子供の感想や文章を見ていくと、語彙の少なさを始め、感じたことを言葉として表現する力が足りないと考えた。そこで、校長のリーダーシップの下、読書活動と表現活動を推進していった。

### ②読書体験活動の充実

校長が中心となり、令和4年度から、読書活動推進リーダーを募集した。桑村小学校のリーダーである6年生が、読書の楽しさを全校に広めていく活動である。6年生は自分たちが楽しむだけでなく、読書の楽しさを薦めるために低学年にも分かりやすいように、紹介する本のあらすじや、シリーズ、おもしろさなどを朝会で紹介した。令和5年度からはリーダーの対象を5年生と6年生の2学年に拡大した。読書を身近に感じる風土を築くことができた。  
(資料7)

公益財団法人「博報堂教育財団」が実施している「お気に入りの一冊をあなたへ 読書推せん文コンクール」に学校全体で参加した。このコンクールのよさは、読書感想文と比べて文字数が250~300字と少なく、作文を苦手とする子も参加しやすいところにある。また、自分の思いを伝える相手を特定することで、どのような思いを届けたいのかが明確になり、自分の思いを自分の言葉で表現できるよさがある。また、感じたことを文字にして表現する機会にもなる。令和4年度から取り組み、令和5年度は1人につき詩を読んだ感想、本を読んだ感想の2枚を応募した。(資料8)

書いて終わりにするのではなく、その子なりの言葉や思いが書かれている各学年の作品を学校長が給食の放送で読み上げ、自分の思いを表現するよさや楽しさ、おもしろさを啓発した。

### ③地域との協働

先にも述べたとおり「社会に開かれた教育課程」の実現には、地域の協力が

欠かせない。教職員はその学校に3～5年しかいないが、そこに暮らす地域の方々は、ずっと学校と共にあるのである。そこで、地域の方々の代表である学校応援団を中心に、学校教育目標を共有し、発展させてきた。本校には、マルベリー（地域の読み聞かせボランティア）が月に1回程度読み気かせをしている。読み聞かせをして終わるのではなく、その後会議室にメンバーが集まり、子供たちの反応、次に読む本の紹介や学年に応じた本の提示の仕方などを話し合っている。校長が示した学校教育目標を地域の方々と共有できていることを実感している。（資料9）

#### 4 研究成果

- (1) つけたい資質・能力について、教職員・児童・保護者の学校評価の結果から良好な結果が出た。この結果からも三者につけたい資質・能力の共有が図れたと考えられる。特に教職員からは、「つけたい資質・能力を子供と共有できた」「行事についてつけたい資質・能力が発揮された子供の姿について、教員から子供へ、上級生から全校児童全体へ啓発されていた」など、教育活動においてつけたい資質・能力を教師と児童が共有できたという回答が多かった。ステージ制をなくし、1年間という長いスパンでめざす子供の姿を共有することで、つけたい資質・能力が途切れ途切れではなく明確になったものと考えている。
- (2) 読書活動を推進する活動が定着したことで、文章を読み取る力がついてきていると感じる。また、学校教育目標が浸透し、他者の考えを尊重して受け入れる風土が育まれてきた。それは、豊かな体験活動や学習において、自分の感じた思いをありのまま表現してよいという安心感にもつながる。読書活動に親しむことで培われた語彙力や想像する力、考える力を自分の思いを通して表現していくために、教育課程において意図的にそうしたことを大切にしたい教育活動を設定していきたい。そして、表現方法も多様であることを大切にしたい。施設見学後のお礼状、コンピュータの端末を活用したスライド、絵日記、新聞でのまとめなど、体験活動と表現活動を一体としていくことが桑村小学校の子供たちの感性を育むことにつながるだろう。学校教育目標を具現化する「感性」は数字では表せないし評価することも難しい。だからこそ、一人一人に丁寧に寄り添い、子供の資質・能力を育むことが重要である。子供たちの成果がいつ発揮されるのは分からないが、未来への種まきをしていきたいと考える。